2Pa－7

両大戦間における生活改善思想の形成と展開（第５報）
家族関係の改善

○奥田都子*　　岡部千鶴**
（*共立女大　　**久留米信愛女学院短大）

【目的】戦間期に提唱された多くの生活改善論の中には、当時の家族のありように対する問題意識に根差した「家庭改良」・「家族改良」論も少なからず見いだされる。本報告では、「家族関係」に関する提言を中心にとりあげ、当時の問題意識と家族関係改善の具体的方向を再整理し、家族関係の「近代化」への志向を確かめるとともに、生活改善運動における「家族関係改良」の位置づけについて考察を加える。
【方法】両大戦間期における生活改善に言及した新聞・雑誌・教科書・政府資料その他の文献資料の調査・収集を行い、家庭生活・家庭経営に関する記述の中から、家族関係の改善の必要性についての言説や改善の具体的提言を抽出し、家族関係についての問題意識および、改善の目的・理念・方策を整理し、提言者たちに志向された望ましい家族像の構成要素を検討するとともに、伝統的家族観や「近代家族」理念との比較考察を行った。
【結果】①結婚においては、当事者の意志不在の配偶者選択や離婚の多さにたいする批判から、当事者の「合意」や「相愛」の必要性、また「人格的結合」の重要性が強調され、一夫一婦理念や婚姻関係の永続性も重視された。さらに、②親権の濫用にたいする批判から、子どもに対する親の義務が強調されたほか、③長男子の優遇や相対的な女子の冷遇などの、家族内のあからさまな差別待遇を是正すべきことや、④家族内の団欒を確保するための種々の生活改善策も提言された。これらの提言を明治期の家族論と比較すると、結婚や家族の成立と存続に「愛情」を欠かせぬものとする家族理念がより明確化されたこと、さらに家族関係の平等化や、家族の情緒的きずなの強化が志向されたことがうかがわれる。